

覚園寺裏山やぐらに関する比較調査
— 5号～10号窟について —

Comparative study on the Yagura tombs hill behind Kakuon-ji temple:
about No.5 to No.10

星野 玲子

Reiko HOSHINO

「鶴見大学紀要」第49号 第4部

人文・社会・自然科学編（平成24年3月）別刷

覚園寺裏山やぐらに関する比較調査

—5号～10号窟について—

Comparative study on the Yagura tombs hill behind Kakuon-ji temple:
about No.5 to No.10

星野 玲子

Reiko HOSHINO

1. はじめに

神奈川県鎌倉市及び三浦半島・房総半島方面には、「やぐら」と呼ばれる岩盤を削り貫いた横穴状の遺構がある。13～15世紀に構築されたやぐらは、納骨の場という役割を担うものと、供養の場として役割を果たすものがある。或いは、両者の機能を兼ね備えたものもある。現在、様々な事情によりその正確な数は把握されていないが、鎌倉市内だけでも1000基以上あると推察されている。類似する岩盤に穿たれた方形の横穴状の遺構は、日本国内において各地に存在するが、狭義をみると鎌倉地方周辺を密集地とする特徴的な葬送といえるだろう。

今回取り上げるやぐらは「覚園寺裏山やぐら」、通称「百八やぐら」である。筆者は、『鶴見大学紀要』第49号 人文・社会・自然科学編33～75頁¹⁾に論じた過去の調査報告書を基に、現在の状況を調査しており、ここにその一部をまとめた。尚、やぐらの概要についても上記の論文を参照していただきたい。

2. 覚園寺裏山やぐらと調査報告書について

覚園寺は、鎌倉市内に所在する真言宗の寺院で、その背後に広がる山一帯にやぐら群が存在する。このやぐら群は最大規模をほこるもので、一部は北鎌倉方面にまで分布している。山中の斜面に広がるやぐらは、最大5段で、同じ平場に数十基のやぐらが横一列に並んでいることも珍しくない。

調査にあたり参考とした『百八やぐら調査報告書』は、鎌倉市教育委員会に所蔵されている資料である。報告書の奥付によれば、鎌倉市からの委託を受けた安田三郎氏が報告書を書いており、記載内容から大三輪龍彦氏・大森順雄氏も調査に加わり、1964～1965年にかけて行われたことがわかる。このように調査年月日が明確に記され、この当時のやぐら1基ずつの状況を細

かく記録した資料は他に例がないこと、それに加え写真が貼ってあることは特に重要である。調査報告書は、やぐら1基に対し1～2枚のカードが作成されていて、総数は222基（197号分がない）、267枚に及ぶ。そこで覚園寺並びに鎌倉市教育委員会の許可の下、これらを資料として安田氏らの調査から約50年後の現況を比較するため、調査を進めている。尚、以下本文中では、便宜上報告書を「カード」と言い、それらが作成された1964～1965年実施の調査を「第1調査」、現況の調査を「第2調査」と呼ぶこととする。

3. 第2調査

3-1. 概要

カードの記載事項は、やぐら番号・地番・方位・内部構造・特殊構造・現存建物・現存遺物・大きさ（縦・横・高さ）・天井様式・羨道の有無・間口・図版・ネガ番号・調査日・調査者である。また、実測図や略図が書かれているものもある。やぐらの番号については、2種類記されている。やぐらの研究は、多くの研究者によって取り組まれてきたが、中でも赤星直忠氏により詳しく行われ、その成果は学術雑誌や書籍、『鎌倉市誌 考古編』²⁾などに収録されている。覚園寺裏山やぐらも、一般的には赤星氏がつけた番号（『神奈川県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第7集』）を以って、個々のやぐらを区別してきたが、安田氏らは新たに番号を付け直していて、それは必ずしも赤星氏の番号とは一致しない。赤星氏が調査を行った段階では、存在が確認されていなかったのか、特質がなく番号を付けなかったのか定かではないが、赤星氏が番号をつけていないやぐらが存在する。それらについても、このカードでは番号を補っているため、カードには通し番号と「赤星氏調査番号」が記載されている。そこで、本論文中では安田氏らによる番号を用い、例えば赤星氏がつけた番号1号であれば（赤1）のように補足表記した。

『鎌倉市地質図』³⁾によると、覚園寺裏山やぐらを構成する地質は、第三紀後期鮮新世上総層群浦郷層に属する未凝結凝灰質砂岩と呼ばれるもので、全体に暗灰色で石粒が目立つ(図1)。



図1. 覚園寺裏山やぐらの岩盤

同地質図によると、鎌倉市周辺を構成する地質は、凝灰岩・砂岩・泥岩といった比較的加工がしやすい石材である。このような地質であるからこそ、これだけ多くのやぐらを構築することが可能だったといえるだろう。しかしながら、それは花崗岩や安山岩のような硬質石材よりも、劣化しやすいということにも繋がる。つまり、やぐらが構築されてから現在までに長い年月が過ぎ、また屋外の山中という日々変化する自然環境下におかれていることから、様々な劣化が生じていると予想される。そこで筆者の調査は、やぐらの形態分類や年代推定のような考古学的観点のものではなく、やぐらの劣化状況と保存に主眼をおいた現状の把握を目的とした。今現在どのような状態にあるか、これまで筆者が各地で行ってきた調査を基に、劣化に関する項目を設け、併せてカードの写真と可能な限り同じ角度からの撮影を試みた。両者を比較することで、安田氏らの第1調査から約50年の間に起きた変化や、変化の見られないやぐらに関しては、なぜ安定的な状況が保たれているのか検討する資料になると考えている。

3-2. 調査項目

既に知られているように、石造文化財の劣化要因は、物理学的・生物学的・化学的の3種類に大別できる。筆者はこれまでに各地のやぐらを調査する中で、そこで起きている状況に着目し、以下の劣化に関する12の項目を設定した。そして各やぐらのどこでどのような劣化が起きているのかデータを集積している。なお、調査は目視観察を中心に判断したもので、発掘調査など現状に手を加えることは行っていない。

物理的要因

温湿度や負荷などを原因とする項目を主に取り上げた。

やぐらの埋没・堆積物の状況

長い年月の中で土砂が入口付近に堆積したり、やぐら内まで侵入し、その結果床面が上昇している所や、地中に殆ど埋没してしまっているやぐらがある。このまま全体が埋没すると、そのやぐらの存在は後世に知られることがなくなるかもしれない。また、既に埋没してその存在が確認されていないやぐらがあるという可能性も否定できない。一方で、堆積物に覆われることによって、外部の劣化要因に直接さらされることなく、本来の壁面の鑿の痕跡や彫刻が良好に残されている場合もある。

岩盤の崩落

筆者のこれまでの調査により岩盤の崩落は各地で見られ、その発生の大きな要因には岩石そのものの質が関わっている。同じ鎌倉市内の泥岩率の高い岩盤は、ブロック状に崩落しやすい性質を持っている。これは、やぐら自体の保護の問題に加え、付近を通行する人の怪我に繋がるため、注意しないといけない要因である。このような崩落防止対策として、岩盤を金網で覆う措置を採っている所もある。その結果、金網のわずかな空間に岩石が引っ掛かっていることがある。これは設置後にも崩落が発生しているという証拠であり、金網は効果的だといえるだろう。しかしながらこのような措置を採っている所の中には、設置作業時の目印と思われる赤や青色のインクが残されたままになっていることもあり、景観を損ねてしまう。

覚園寺裏山やぐらの地質の場合、樹木の根ややぐらにかかる力の不均衡によって生じる亀裂から崩落する傾向にある。その大きさは、ひと塊が1mを越える大型のものも少なくない。

亀裂

先に述べたとおり、やぐら上部からかかる負荷や、草木の生育により亀裂が発生する。その亀裂は、壁面や天井の剥離に繋がるだけでなく、やぐらの大規模な崩落を招く要因にもなっている。また、砂岩層と泥岩層の間など、岩盤の堆積層の境に亀裂が生じていることもある。

粉状・粒状の落下物

細かい石材粒子や1cm程の極小さな塊が、床面に落下していることがある。一見、壁面の加工痕跡が良好に残るやぐらにおいても見られ、少しずつではあるが、劣化が進んでいるとわかる。

磨耗や磨耗の進行による壁面の湾曲

特に、砂岩のように粒子が細かく均質な層に多く見られる光景で、長い年月において風雨が吹き付けるこ

とて壁面が磨耗したり、大きく湾曲した状態になってしまう。いくつかのやぐらが横に連なって配置されている場合、隣接するやぐらの共有する側壁が掘削され、構造力学上通常の側壁を有する不静定梁構造から、幾つものやぐらが連なった大きなひとつの箱状の単純梁構造になる。一般に同じ長さであれば、途中に支持体（この場合、左右の側壁）のある不静定梁構造の方が強度は高い。このような状況から、やぐらも側壁を失った所に上部から荷重がかかることで、天井部分に曲げ圧縮と曲げ引っ張りの状態を招き、その結果やぐら内部の天井に引っ張りによる亀裂が発生したり、角に剪断破壊が生じる可能性がある（図2）。

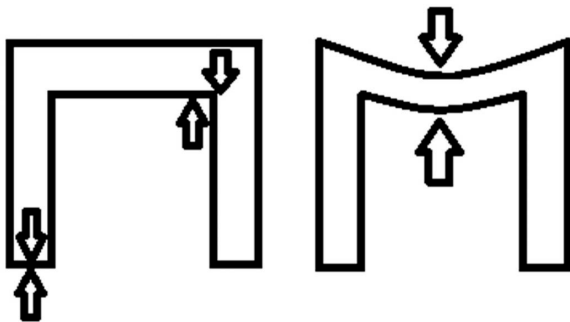


図2. やぐらにかかる負荷

表層剥離

表層剥離は、その形態からさらにⅠ～Ⅴの5種に分類した。これも深刻な問題となっていて、耐えきれずに壁面から落下してしまうこともある。表面は、やぐらを築いた時の鑿・鑿のような工具の痕跡や、彫刻・彩色なども失われてしまう。剥離の原因には、後述する析出物によるものもあれば、苔や地衣類が表面下で生育していることもあるが、やぐらの構造上の不均衡により生じることもある。さらに、これまでの調査から、冬場の温湿度の低下によって凍結や乾燥が起き、その結果発生することがわかっている。

Ⅰ 厚み1cm以下の層状剥離

表面層が岩盤から浮き上がることで、中にはポケット状になっていることもある。その隙間は、昆虫にとって恰好の住処となっている。劣悪な状況になると、10cm程の隙間に及ぶこともある。また、極薄い5mmに満たない浮き上がりは、わずかな衝撃で壁面から剥離・落下する危険性がある。

Ⅱ 厚み1cm以上の層状剥離

これは亀裂に伴って発生していることが多い。厚みをもっている分、浮き上がっている箇所が重く、落下することも多い。

Ⅲ まとまった塊で剥離

大きいもので50cm以上の広範囲にわたって、壁面がまとまって浮き上がっていることがある。かろうじて

壁面と接触しているような危険な状態であるため、わずかな衝撃でその広範囲全てが落下してしまう可能性がある。

Ⅳ 瘡蓋状の剥離

表面に凹凸があり、まるで瘡蓋のような状態の剥離が発生している。また、このような表面に凹凸がある場合も、その表面下の新鮮面は平滑であるため、外部と接することで二次的に形成された状態と考えられる。

Ⅴ 鱗状の剥離

まさに魚の鱗のように、小さく薄く層状にめくれている状態を指している。

生物学的要因

屋外の地面と直結して動かさない大型の石造物にとって、生物学的要因は避けることができない。しかし、むやみに整備してしまうと、長年築かれてきた生態系にも影響を与えかねず、また景観を損なう可能性もあるため、悪影響を与えるもの、与えないもの見極めが重要となる。

やぐらに悪影響を与える樹木（根）の生育

これまでに述べた各種の劣化を引き起こす原因にもなっている。何らかの要因であいたわずかな隙間に樹木の根が侵入し、内部へ深く生育しながら根を伸ばしていく。その結果、亀裂が増大したり、岩盤崩落を招いたり、枝が伸びることで次第に重量が増し、更に風で揺られることで益々亀裂が増幅することもある。

現在のところ、やぐらには悪影響を与えていない付近に生育する樹木（根を含む）

やぐらの中、或いは周辺に生育する樹木のうち、のような悪影響を与えていないものを指す。また、樹木の根が岩盤に沿って伸びることで、返って岩盤崩落を防いでいる場合もある。しかしながら、今後悪影響を与える状況に変化することも考えられるため、注意が必要である。

その他植物

樹木以外の植物をまとめてこの項目にした。細い蔓が岩盤の隙間から伸びていたり、天井に沿ってやぐら内部に侵入したり、やぐら内で花が咲いていることもある。これらを餌として小動物や昆虫が寄ってくることもあり、更なる劣化が懸念される。

苔・地衣類の繁殖

表層剥離にも一部関連するが、わずかな隙間から表面下へ入り込み、そこで繁殖し、その勢いで岩盤表面を浮き上がらせている所もある。また、表面に苔や地衣類が繁茂することで、岩盤に風雨や直射日光が当たるともなく、表面を守っていることもあるため、一概に悪影響とはいえない場合もある。しかし、彫刻や彩色を傷つける可能性もあるため、判断は慎重に行う

必要がある。

化学的要因

近年の工業化・都市化に伴い、乗り物の排気ガスや、工場から排出されるガスなどが原因となって生じる大気汚染や酸性雨が問題視されている。その影響は屋外の文化財にも当てはまり、金属製品の腐食や石造文化財の表面の汚れなどが報告されている。

化学的劣化要因に分類される中で、今回取り上げる劣化は析出物の発生である。これは物理的な作用によることも多いが、ここでは化学的要因に含む。

析出物の発生

析出物の素となっているのは岩盤を構成する石材の成分であったり、雨水であったり、土壌の成分であったりと様々で、降った雨は岩盤から直接取り込まれたり、土壌に浸透してそれが地中を伝って岩盤内部に吸収されたりする。水を媒介として岩盤内部から表面層で水蒸気となり、水は外部に放出されるが、その際水と一緒に移動してきた様々な可溶性成分が岩盤表面、或いは表面層下で結晶化し、表面に白色（多くの場合白色だが、場合によっては灰色など他の色のこともある）の析出物が発生する。これらの発生箇所は、岩盤表面が乾燥していることが多く、一方常に岩盤から水が染み出ている所では、含まれている可溶性成分が結晶化しないため、析出物は見られないという傾向にある。析出物については、形状から以下のⅠ～Ⅳに細分した。

Ⅰ 表面に凹凸があり、年間を通じて存在する白色の殻状物質

Ⅰ～Ⅲは、いずれも年間を通じて存在している析出物である。硬い殻状で厚みを有し、岩石粒子を包み込むように析出するものもあり、岩盤表面層も一緒に剥離してしまうこともある。析出物の中ではこの形態が最も多いと考えられる。

Ⅱ 年間を通じて存在する白色の殻状物質で、表面が平滑な物質

Ⅰと同様、年中確認できる硬い殻状物質である。表面が平滑であるため、装飾のために壁面に塗られた漆喰や、白土のような白色塗料と混同しないよう注意が必要である。

Ⅲ 年間を通じて存在する白色の殻状物質で、極薄い物質

Ⅰよりも厚みのない極薄い層状を形成している。これも、装飾のための白色塗料と混同しないよう注意が必要である。Ⅰ～Ⅲは、組成分析をするとカルシウムと硫黄を多量に含んでいる。

Ⅳ 繊維状の軟質物質で、冬場を中心とした温湿度の低い期間にしか存在しない物質

Ⅰ～Ⅲは年中存在する硬い殻状という共通点があるのに対し、Ⅳは他の3種とは形状も発生時期も異なる。これまでの各地の調査から、1年の中でも温湿度の低下する秋から春先という限られた期間にのみ析出し、夏場の温湿度が上昇する時期には姿が見られず、また温湿度が低下する秋以降に析出する。またその形状は、軟質の繊維状である。析出する際、繊維状物質の間に石材粒子が混同していることもある。これらはマグネシウムやナトリウムと硫黄を多く含む物質である。

その他

工具痕の有無

状態の良好なやぐらでは、岩盤を削り貫いたり仕上げる際に使用した鑿痕や、梵字・仏像・石塔など各種の浮彫に使用した鑿の痕跡が見られる。これらは700年余り前の人が一振り一振り刻んだ証拠である。また、鑿痕を見ると、10cm以上の長さで薬研彫りされているもの、数cmの細い鑿で掘られたものなど、道具には数種類あることがわかる。当時のものと思われる工具は殆ど見つかっていないため、この岩盤に刻まれた痕跡が道具を考える手がかりとなる。このような構築当初の痕跡も、これまでに述べた様々な劣化により、失われてしまうことが多い。しかしながら、現在も良好な姿を留めている場所もあるため、やぐらの残存状況の判断の指標となる。

以上の項目について、カードに記載されている当時の様子、写真とあわせて現在の状況を観察した。

4. 調査結果

既に述べたように、覚園寺裏山やぐらは「百八やぐら」と呼ばれているが、これは108基のやぐらという意味ではない。『鎌倉市誌 考古編』⁴⁾には、150基と記されているが、安田氏らのその後の調査で付けた番号に従うと、計223基が1964～1965年の第1調査で確認されている。但し、このカードは覚園寺境内や、その附近に分布するやぐらも同じやぐら群として捉えていて、赤星氏はこれらのやぐらを含めていない。

今回はこれまでに観察した範囲のうち、通し番号の早い順に5号（赤5）～10号（赤10）までをまとめた。以下、各やぐらについて詳しく状況を述べ、それぞれの調査カードも併せて掲載した。調査日・規模・天井様式・羨道の有無・内部構造・特殊施設は、カードの記載内容（第1調査）を用いた。カードに書かれた方位は、遺跡の主軸方向を示すものであるため、記載内容から開口方向を割り出した。規模に関しては、約50年の歳月の中で変化が生じていると考えられるが、今回はまず劣化状態を始めとする現状の把握を主たる目的

としたため、現在のやぐらの規模は今後の課題とした。
 「第1調査の写真と同アングルの現況」は、カードに貼ってある第1調査時の写真を先に、可能な限り同じアングルから撮影した第2調査分を下に配置した。尚、過去の写真は白黒写真である。そして図版番号と併せて、カードの写真番号と被写体がやぐらのどの部分に該当するか記載した。本文中ではやぐらに向かって正面を「奥壁」、向かって右側を「右壁」、向かって左側を「左壁」、天井は「天井」と表記した。例えば、壁面の中でのどのあたりかを更に詳しく述べる時、奥壁の右寄りには「奥壁右側」と記した。更に、各やぐらの調査カードを図3・13・17・21・31・34に示し、12項目の詳細については、必要に応じて現況の写真を掲載した。

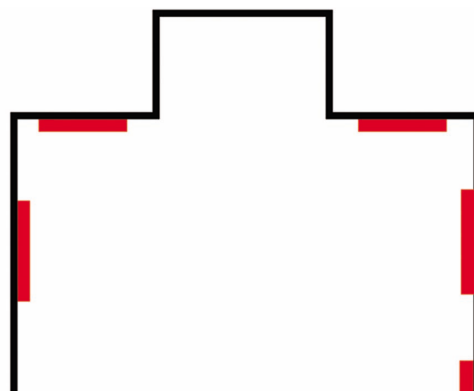


図4. やぐら平面図

第1調査の写真と同アングルの現況：

4-1. 5号（赤5）やぐら 通称「筥やぐら」

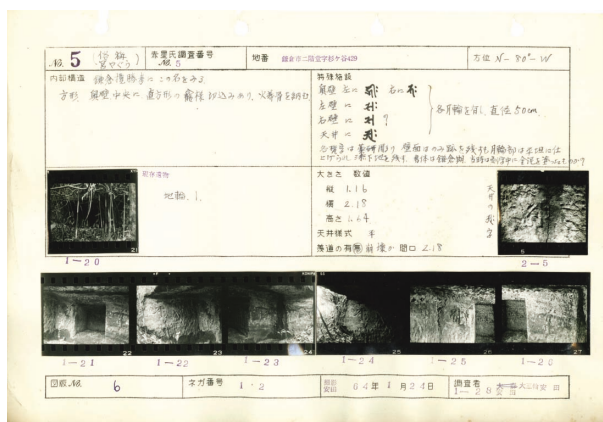


図3. 5号窟調査カード

開口方向 : 西
 第1調査日: 1964年1月24日
 規模(単位 = m) 縦: 1.16 横: 2.18 高さ: 1.64
 間口: 2.18
 天井様式: 平 羨道: 無(崩壊か)
 内部構造: 火葬骨を納める
 現存遺物: 地輪1
 特殊施設: 奥壁左 奥壁右 左壁 右壁
 天井 各月輪を有し直径50cm

各梵字は両葉研彫。壁面は鑿痕を残すも月輪部は平坦に仕上げられ、漆下地を残す。鎌倉期、当初は刻字中に金泥を塗ったものか。

図4にこのやぐらの簡単な構造を示した。奥壁中央は、さらに掘り込んだ直方体の龕が形成されている。江戸時代の書物『鎌倉攬勝考』⁵⁾に「筥やぐら」と紹介されているのは、このやぐらである。奥壁中央の大型の龕を指して「筥」と表現したのだろう。図内の■で示した箇所には、月輪とその内側に梵字が各1個ずつ彫られている。

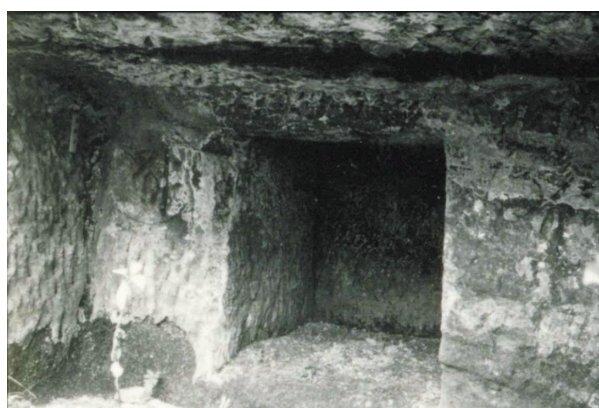


図5. 1-21 奥壁





図6. 1-22 左壁



図8. 1-26 奥壁右側



図7. 1-25 奥壁左側



図9. 1-23 奥壁右側と右壁



状況：

入口付近から内部に向かって傾斜しており、堆積物の量は第1調査時よりも増加している。

天井部は既に崩落したような断面である。また、図10に現在の右壁の入口側を示した。第1調査のカードでは、梵字の存在についてこの右壁手前のものについては触れていない。しかしながら、半円形の月輪が見え、内側に梵字らしきものが残されている。つまり、本来の壁面はもっと前面まで張り出していたが、崩落や磨耗によって失われたということがわかる。



図10. 右壁入口側

左壁の一部月輪内を通る亀裂（図6）は、左壁から天井を通り（図11）、右壁中央部まで伸びている（図9）。このやぐらは、梵字や各壁面の角もよく残っているため、一見状態が良好であるという印象を持たれるが、壁面と天井を結ぶ亀裂は、天井崩落の危険性を含んでいるため、今後注意が必要である。

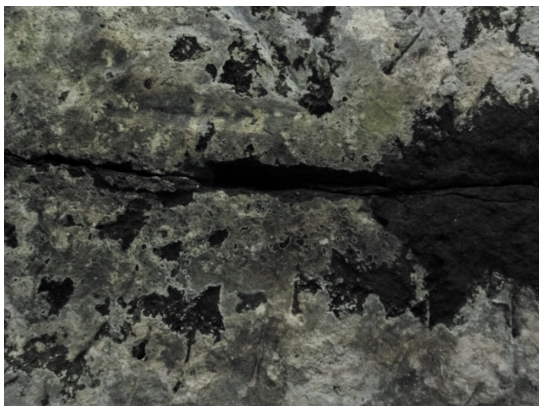


図11. 天井部分の亀裂と析出物

第1調査写真の方が、現在よりも梵字をはっきりと読むことができるため、わずかではあるが表面が磨耗しているものと推察される。但し、他のやぐらに比べ梵字の残存状況は良好で、薬研彫りの内側に見られる下地の漆らしき黒色や、一部金泥かと思われる光る箇所を確認することができる。

I 各壁面の下部は表層が失われているが、その範囲を比較しても変化が見られない（図5・7）。つまり、表層剥離は50年前に既に発生していて、当時の状態のまま殆ど進行していないといえよう。剥離して新たに表面に露出した面は、水分を含む暗灰色をしている。また、下部にのみ発生しているのは、恐らく地面から伝わって侵入した水分が、冬場の気温の低下に伴って凍結し、日が当たると融解するというサイクルの中で生じるものと考えられる。

また、奥壁左側上部に見られる亀裂は、第1調査にも確認できるが、亀裂を中心としてその周囲の剥離が現在進行している（図7）。

右壁の亀裂の隙間から樹木の根が生育している。亀裂自体は図6にも確認されているが、第1調査の時点では、根の生育は認められない。根の生育は亀裂を増幅させ、このやぐらの場合、先に述べたように亀裂が天井と左壁までという広範囲に繋がっているため、やぐら自体の構造に不均衡を招く要因にもなっている。

第1調査の写真は、撮影に際して多少草花を除去して臨んだ可能性があるため、現代の状況の観察時の状況を記すこととする。特に奥壁右側と右壁付近に弦が伸びている。

やぐら外の入口上部に苔・シダ・地衣類が繁茂している。またこれらの場所は水分を含んでいる。奥壁右側にも苔や地衣類が繁茂しているが、この辺りは植物の弦も伸びているため、これらが生命活動を営むだけの水分を岩盤が含んでいることがわかる。

I 現在は、各壁面の上部に特に多く見られる。奥壁左側上部の月輪周辺にも目立つ（図7）。奥壁右側上部は、広範囲にわたり白色をしているが、現在の方が一面白色を呈しているように見える。また、梵字及び月輪の半分ほどまでしか白色になっていないため、これは装飾の白色塗料ではなく、析出物と判断できる（図8）。天井にも析出物Iが見られ、さらに表層剥離Iも発生している（図12）。この剥離は、析出物によって生じたものと考えられる。このように、各状況は要因が複雑に関連して発生している。



図12. 奥壁と天井の境

月輪の内側は、非常に細かく平滑に仕上げられている。これは、鑿のような工具で整形されたものと考えられる。また、特に奥壁左側と天井にやぐらを掘削した際の鑿痕が良好に残っている。

覚園寺裏山やぐらに関する比較調査

4-2. 6号(赤6)やぐら

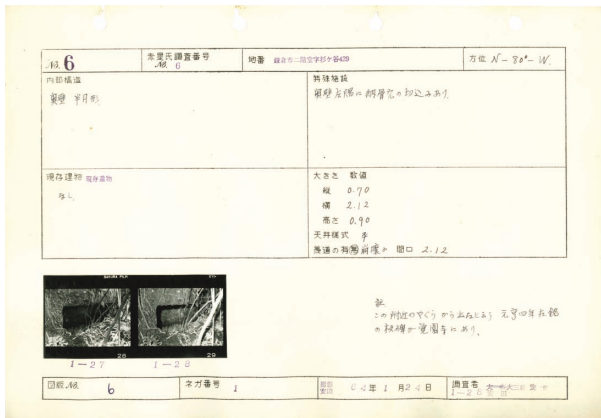


図13. 6号窟調査カード

方位：東

第1調査日：1964年1月24日

規模(単位=m)

縦：0.70 横：2.12 高さ：0.90 間口：2.12

天井様式：平 羨道：無(崩壊か)

内部構造：奥壁半円形

現存遺物：なし

特殊施設：奥壁左隅に納骨用切り込みあり。

注：この附近のやぐらから出土したという元享四年銘の板碑が覚園寺に在る。

第1調査の写真と同アングルの現況：



図14. 1-27 やぐら全景



状況：

第1調査の時点においても、恐らく半分以上が既に埋没していたが、現在はさらに堆積物が増加し、右壁は一切見えなくなっている(図14)。

I・II やぐら内部を覗き込むと、奥壁や天井に剥離が認められる(図15)。現在右壁は埋没しているため状態はわからないが、恐らく堆積物によって壁面が外気に触れていないため、劣化の進行は遅いだろう。このまま堆積物が増加し続けると、いずれやぐら全体がその姿を隠してしまう。



図15. 天井

第1調査時の画面右側に写っている樹木は現在ない(図14)。天井には細い根が張り出している。また、やぐら外入口左側に向かって根が伸びている。

やぐら外の入口上部に苔や地衣類が見られ、岩盤も水分を含んでいる。奥壁と左壁(図16)にも苔や地衣類が見られる。

I 奥壁と左壁の苔や地衣類の繁茂する中でも、析出物が見られる(図16)。しかし、いずれも広範囲にわたるものではなく、点在する程度である。図15のように、天井は一面白色の析出物に覆われている。



図16. 左壁

堆積物が多く、直射日光や風雨の影響も少ないと考えられるが、天井の鑿痕が不明瞭になりつつある（図15）。

4-3. 7号（赤7）やぐら

7	赤7	覚園寺二重塔跡	方位 N-70°-E
内部構造 方形	特殊施設 なし		
現存遺物 なし	大きさ 竪道 縦 1.80 横 2.74 横 4.10 高さ 1.14 天井様式 平 羨道の有無 崩壊か 間口 4.10		
図版/紙 7	本が通等 1	撮影 年月 64年1月24日	調査者 山田 幸三郎

図17. 7号窟調査カード

方位：西
 第1調査日：1964年1月24日
 規模（単位=m）
 縦：右1.80 横2.74 横：0.10 高さ：1.14
 天井様式：平 羨道：無（崩壊か）間口：4.10
 内部構造：方形
 現存遺物：なし
 特殊施設：なし
 第1調査の写真と同アングルの現況：



図18. 1-30. 左壁

状況：

やぐらの規模は大きく、高さもある構造と推察されるが、入口付近にある大量の堆積物を始め、やぐら奥に向かって傾斜している。図19のように右壁側の堆積物は特に多く、現在は8~9割りほどが埋没していると考えられる。また、入口付近の堆積物が多く中に入ることはできなかったため、手を伸ばしてカメラをやぐら内に入れての撮影となった。



図19 やぐらの外 右側

第1調査の写真では入口左側に岩石が見られるが、現在は既に崩落している。また、やぐら外にある樹木の隙間に岩石が詰まっている。

左壁の奥側及び天井に亀裂が見られる（図18）。

I 奥壁や左壁などに点在して見られる。

やぐら外の入口付近には大きな木が生長し、根が伸びている（図20）。いずれやぐら内に侵入するなど、何らかの影響をもたらす可能性が考えられる。

覚園寺裏山やぐらに関する比較調査



図20. やぐら外 左側

やぐら外の入口上部には、苔やシダ類が生えている(図19)。また、その周辺の岩盤は水分を含んで濡色を呈している。やぐら内では、奥壁に苔が生えている。

I 奥壁にIに分類できる白色の析出物がある。

やぐら構築時の鑿痕が残存している。

4-5. 8号(赤8)やぐら

赤8 (赤8号)	学名氏標本番号	地番 藤原町二丁目字赤8番100	方位 N-20°-E
内部構造 神奈川地蔵堂のこけら見	特殊施設	奥壁面 右方2基 左方1基の五輪塔浮彫あり 高さ2.37 横3.80 (奥壁中央) 高さ1.83 (奥壁中央表土上) (表土下0.28) 天井様式 旧状は平面か、現状は崩落痕あり 羨道 無 間口 4.20	
現存遺物	現存遺物	なし	
1-34 1-35 1-36 1-37 1-38 1-39 1-40			
図録.48	7	調査日 1964年1月24日	調査者 大田 隆夫

図21. 8号窟調査カード

方位：東
 調査日：1964年1月24日
 規模(単位=m)
 縦：2.37 横：3.80(奥壁中央)
 高さ：1.83(奥壁中央表土上)(表土下0.28)
 天井様式：旧状は平面か、現状は崩落痕あり
 羨道：無 間口：4.20
 内部構造：方形
 現存遺物：なし
 特殊施設：奥壁面に右方に2基・左方に1基の五輪塔浮彫あり。

各2区の方形に彫りくぼめられている。
 このやぐらが作られた後に加工されたと考えられるが、塔はなお鎌倉期の様式を認む。
 但し、地輪の高さが少し高いのは、やや時代降下を示す。
 地輪下方に方形納骨穴あり。
 右壁に方形に加工しかけた痕あり。
 奥壁と同目的か。
 左方五輪の種子中に金箔を認む。

第1調査の写真と同アングルの現況：



図22. 1-34. やぐら全景





図23. 1-25 左壁と奥壁左側



図25. 1-36 奥壁右側と右壁



図24. 1-35 左壁と奥壁左側



図26. 2-2 左壁





図27. 2-3 奥壁左側

状況：

やぐらよりやや離れた所から全景を見ると、開口部の堆積物が増加し、一見やぐら全体の8割ほどが埋没しているかのような状況である（図22）。一方、内部の堆積物は幾分少なく、奥に向かって傾斜している。しかしながら、図23の奥壁左側に掘られた納骨穴の見え方を比較すると、堆積物が増加していることがわかる。

落石したと思われる岩石が見られるが、それはやぐら内部ではなく、岩盤上部で落石したものがやぐら内に収まったと考えられる（図24）。

両壁と天井とが繋がっている大きな亀裂が1箇所、この他天井にもう1箇所、両壁面に繋がる亀裂と平行に亀裂が生じているため、今後のやぐら自体の崩壊も懸念される（図28）。



図28. 天井

I 奥壁に刻まれた五輪塔の浮彫が見られる。表層の浮き上がりが増加したり、剥離落下すると五輪塔の輪郭も不鮮明になる可能性がある。奥壁左側の五輪塔浮彫周辺は、表層剥離 I の発生箇所の表面下部に I

に分類される白色で硬質の物質が見られるため、剥離の原因は析出物の発生とわかる。

入口付近に笹のような植物が繁茂している（図22第1調査）。

やぐら外の入口上部の水分を多く含む箇所に、苔やシダ類が繁茂している。また、右壁・奥壁左側の五輪塔レリーフの下部（図23）には苔と地衣類が、奥壁右側の五輪塔の浮彫（図24）にも苔が生えている。

I 右壁・奥壁・天井に析出物が見られ、左壁にもわずかではあるがその発生が認められる。

天井には鑿痕が比較的はっきりと残る箇所と、全く見られない箇所がある。また、奥壁の浮彫とその周辺は、まっすぐに整えられた切込みの角も直線を保っている（図23・24）。

その他：五輪塔レリーフと地輪部分に納骨施設を有している。遠めに壁面全体を見ると、右壁にも奥壁のように方形に切り込むことが予定されていたのかと思われる窪みがあるが、想像の域を出ない（図25）。また、五輪塔には各輪に梵字が刻まれている（図29・30）。その中にはわずかながら金箔（金泥か）を残す箇所がある。堆積物の流入は、奥壁のレリーフ下部に設けられた納骨用の穴を埋没させる可能性があり、入口部が堆積物によって狭くなっているため、奥壁に風や雨が直接吹き付ける事態を減らし、その結果金色の装飾が残っていると考えられる。



図29. 奥壁左側五輪塔浮彫空風輪



図30. 奥壁左側五輪塔浮彫 水輪



図32. 2-6 やぐら全景

4-6. 9号 (赤9) やぐら

9	赤9	覚園寺	〒401-2201
内部構造 方形 埋没著し	特殊施設 なし		
現存遺物 地輪3・火輪2・空風輪2・水輪1 (以上凝灰岩)	大きさ 数個 縦 約 1.1m 横 約 1.2m 高さ 約 0.7m 天井様式 平 開口 1.16 構造の材質 凝灰岩		
調査日 1964年1月24日	調査者 赤坂 隆夫		

図31. 9号窟調査カード

方位：南東
 調査日：1964年1月24日
 規模 (単位 = m)
 縦：右1.18 左0.80 横1.23 高さ：0.78
 天井様式：平 羨道：無 間口：1.16
 内部構造：方形 埋没著し
 現存遺物：地輪3・火輪2・空風輪2・水輪1 (以上、凝灰岩)

特殊施設：なし

第1調査の写真と同アングルの現況：



図33. 2-7 内部

現況：

第1調査時に、やぐら自体が既に埋没していることが指摘されているが、現在はさらに土砂が流入し、また入口付近に堆積物が多いことから、離れた所からでは内部は殆ど見えない (図32)。近づいて内部を覗き込むと、現在は7~8割程が地中に埋まっているものと推察される。凝灰岩製の遺物が見えるが、これらもまた埋没しつつある (図33)。

覚園寺裏山やぐらに関する比較調査

やぐら外の入口上部には、大きな木が下部に向かって生長している。幹・枝ともに大きく、木の重みと風で枝が揺られることによる岩盤への負担が懸念される。

やぐら周辺に植物が繁茂している（図32）。

やぐら外の入口上部の岩盤は水分を含んでおり、苔が繁茂している。

4-7. 10号（赤10）やぐら


洞窟 10	学名氏調査番号 1010	地名 静岡県三島市野崎8429	内山 No. 201-E
内部構造 方形	特殊施設 なし		
現存遺物 なし	天井様式 平	天井の構造 なし	開口 1.64
	高さ 断面 縦 0.48 左 1.14 横 1.64 高さ 1.36		
			
図録 48	資料番号 2	調査日 1964年1月24日	調査者 大塚 大助 他

図34. 10号窟調査カード

開口方向 : 西
 第1調査日 : 1964年1月24日
 規模 (単位 = m) : 縦右0.48 左1.14 横1.64
 高さ : 1.36
 天井様式 : 平 羨道 : 無 間口 : 1.64
 内部構造 : 方形
 現存遺物 : なし
 特殊施設 : なし

第1調査の写真と同アングルの現況 :



図35. 2-8 やぐら全景



図36. 2-9 左壁と奥壁

状況 :



図37. 左壁と奥壁

やぐら内部に堆積物があり、特に左側に多い(図37)。

図38の — のように、天井に幾つもの亀裂が生じている。その亀裂から、表層剥離を招くと予測される亀裂もあるため、今後の注意深い観察が必要である。



図38. 天井

右壁の入口側が大きく湾曲している(図36)。

各壁面にシダが繁茂しているが、特に奥壁に著しい(図35・36)。壁面は水分を含む濡色をしていることから、植物の生長に適した水分が供給されていることがわかる。

各壁面に苔・地衣類は見られる(図35・36)。やぐら外の入口上部も苔に覆われている。左壁は、苔やシダが多量にあるため、壁面の状態はわからない(図35)。

I 天井右側に集中して析出物 I (図38○) が確認できるが、他のやぐらに比べて全体的に少ない。

天井部に鑿痕が確認できる。

5. まとめ

今回第1調査と称した1964年作成のカードには、当時の様子を伝える貴重な情報が書かれている。今回、それを基に行っている再調査についてまとめたが、やぐらの番号からわかるように、これはごく一部であり、他のやぐらについても調査を行っているため、今後随時報告していく。筆者が設けた12の項目を見ても、現在様々な劣化が見られ、全く劣化の見られないところは無きに等しい。特に堆積物の流入は著しく、しかしその状況が、直接雨風や日差しがやぐら内に入ることを防いでいる。また場合によっては、壁面の浮彫や工具痕を守っていることもあるだろう。山の中という環

境において、特に目立つのは樹木の存在であった。この50年の間に樹木の根が生長し、岩盤の亀裂の隙間に入ってしまうことは、やぐらの構造を不安定にするため注意が必要である。その一方で、50年前にあった樹木が現在はないという状況もみられる。

やぐらの劣化の中で大きな問題と考えられるのは、析出物の発生である。本文中で述べたように、その形態は大きく2種に分類でき、I～IIIの硬質で年中存在する形態は、第1調査においても類似した分布状況であった。IVとした軟質の析出物は、今回報告したやぐらには確認されなかった。これは、一見岩盤への負担が少ないように見られるが、よく見るとそこに細かい石材粒子が混じっていることがあるため、やはり岩盤表面の劣化に関係している。冬場の限られた時期にのみ姿を現すため、調査時期によっては確認できないこともあり得る。硬質の析出物が岩盤表層下で結晶化してしまった場合、その圧力で表面が剥離することもあり、これまで残されてきた工具の痕跡や浮彫をも失う原因となる。

このような劣化に対する有効な対応策は確立されていないが、劣化は徐々に進んでいる。そこで、現状を詳細に記録しておくことが必要と考え、今回図版も併せて掲載した。このようなデータを蓄積することで、安田氏らの第1調査時のカードから様々なことがわかるように、2000年代初期の様子として現況を残したいと考えている。今後も各やぐらの詳細な情報をまとめていく。

謝辞

調査を行うにあたり、覚園寺仲田昌弘住職、仲田順昌副住職、鎌倉市教育委員会にご理解・承諾を頂き取り組んでいます。また、これらの資料を基に研究するにあたり、大三輪龍哉氏・大三輪邦子氏・古田土俊一氏・鎌倉市教育委員会米澤雅美氏にご協力を賜りました。この場に記し、皆様に厚く御礼申し上げます。

引用・参考文献・註

- 1) 「覚園寺裏山やぐらに関する研究—『百八やぐら調査報告書』を資料として—」(星野玲子 2012年)
- 2) 『鎌倉市誌 考古編』(鎌倉市史編纂委員会 吉川弘文館 1959年) 463～534頁に収録
- 3) 鎌倉市地質図は、『鎌倉市文化財 総合目録 地質・動物・植物篇』(鎌倉市教育委員会 同朋舎 1986年)に収録されているものである
- 4) 『鎌倉市誌 考古編』497頁
- 5) 『鎌倉攬勝考』(植田孟縉 1829年 『大日本地誌大系』雄山閣 1929年)